

2020 年度 第 1 回まほろん館長講演会

自然災害としての新型コロナ ——歴史のなかの感染症——

菊池 徹夫

2020(令和2)年度は、思いもかけず新型コロナ禍の中で迎えることとなってしまいました。被害に遭われた方々には、先ずは心からお見舞い申し上げます。

また、東日本大震災の追悼式など、とくに福島にとっては大事な記念行事等を中止せざるを得なかったことは、まことに残念でした。

われわれ人類は、またまた感染症のパンデミック(世界的大流行)に見舞われてしまったのです。日本列島に限っていえば、阪神大震災や東日本大震災をはじめ、地震や津波、火山噴火、そして毎年やって来る台風、山崩れ、洪水などの被害は忘れようありませんが、年中行事のようなインフルエンザは別として、ここしばらく大規模な感染症の怖さは忘れていたと言わねばならないでしょう。

新型コロナウイルスの被害を経験し、しかもますます国際化する世界の中で生きざるを得ないわれわれは、今後こうした感染症の流行をも、むしろ自然災害の一つとして覚悟し、それへの備えに努めるべきかも知れません。貧困と飢餓、悪政、戦争、自然災害、そして感染症はこれからも人類にとっての最大の苦であることに間違いはないのですから。

このところ、コロナ状況のなか、改めて過去の感染症の歴史に人々の関心が向けられ、そうしたことを扱った文学作品や研究書、様々な歴史的エピソードなどが取り上げられているのは、皆さんお気づきのことと思います。

そこで今回は、そうしたものを参考にさせていただきつつ、この自粛・蟄居の間、私なりに考え、学んだことについて、少しお話しさせていただきたいと思います。

今回の新型コロナの流行は、文字どおり人類史的大事件であるばかりでなく、私事にわたって恐縮ですが、じつは第二次世界大戦勃発の年に生まれ、敗戦の飢餓と貧困の中で子供時代を過ごし、その後さまざまな自然災害を目の当たりにし、定年直後に東日本大震災を間近に経験した私個人にとっても、予想もできなかった人生経験でもあるからです。

人類史上の有名な感染症の例

- 古代ギリシャ アテナイのペスト
- 14 世紀の「黒死病」
- 15 世紀末 コロンブスと梅毒
- 16 世紀以来、度々のペストの流行
- 近世、はしか、天然痘、コレラ、チフス、結核、インフルエンザ
- 現代、スペイン風邪、ポリオ、エボラ出血熱、エイズ、サース、マーズ、新型コロナなど。

日本史上の主な感染症

- 縄文時代後期、入江高砂貝塚のポリオ
- 弥生時代後期、青谷上寺地遺跡の結核
- 日本書紀 崇神天皇紀に疫病の流行。
- 欽明天皇 13(552)年、百済から仏像が伝わるも疫病も蔓延し、廃棄。
- 天平の疫病大流行(735~737) 天然痘が全国で流行、政権中枢の藤原 4 兄弟が相次ぎ死去。日本の総人口の約 3 割が失われたとの推計も。
- 平安時代前期 貞観5(863)年、「咳逆」大流行。インフルエンザとも考えられる。新羅・渤海由来かともされ、貞観 11(869)年、平安京の神泉苑で鉾を立てて疫病退散を祈った御霊会が、後の祇園祭の起源とされる。なお貞観年間には大地震や富士山噴火なども。
- 平安時代中期、藤原道長最盛期の 998 年、「赤疱瘡(もがさ)」、いまの麻疹(はしか)が流行。
- 戦国時代の永正 9(1512)年、梅毒が日本で初めて流行。
- 安政 5(1858)年、「虎狼痢」(コレラ)が日本全国で流行。江戸市中での死者 10 万人とも。
- 文久 2(1862)年、はしか大流行。「はしか絵」も。
この頃、緒方洪庵(1810~1863)が天然痘などの予防・治療に貢献。
- 大正時代、1918~20 年、「スペイン風邪」(A 型インフルエンザ)が第一次世界大戦直後の世界中で蔓延、死者数千万人、日本国内では「流行性感冒」と呼ばれ死者 45 万人。未だウイルスの知識なく、隔離とマスクだけが予防策。島村抱月・松井須磨子、与謝野晶子らが罹患。晶子「感冒の床から」で自肅要請型のゆるい対策へ抗議。
- 令和 2(2020)年、新型コロナウイルスのパンデミック。日本での感染者、死者は・・・？

新型コロナと日本人 いくつかのヒント

- 日本は「うまくやった」のか？
- アジアは総じて死者数が少ない。
- 「日本の奇跡」への様々な説明

一般的な理由

人々の努力と我慢、自肅、ステイ・ホームの徹底
政府、官僚、「専門家」の指導力(?)
マスコミの報道・情報

医学、生物学的説明

ウイルスの型の違い、人種、遺伝子、BCG 接種の有無などなど。

歴史、文化的説明

日本の伝統文化と関係？

- * 握手、ハグ、キスの文化とお辞儀、合掌の文化
- * 玄関で履物を脱ぐ習慣(竪穴住居は内部を神聖な空間と見、屋内祭祀も)
「鬼は外、福は内」、畳の生活。
- * 風呂好き
- * マスクに慣れている(西欧のサングラス習慣との対比)。
- * 日本人は清潔、きれい好きか？
江戸の清潔さと中・近世ヨーロッパの都会の猥雑さの対比。
神道の「穢れ・祓い・清め」の思想。厄除け、魔よけ、盛り塩、道祖神、塞の神、アマビコなど、挨拶にも「恙なく」
- * 社会制度とも関係？
日本のタテ社会と欧米のヨコ社会
 - ・縦型の権威主義的社会では、上下関係、横並び、恥の文化、匿名の傾向、偏見、忖度、以心伝心、自粛。感染率は？死亡率は？
 - ・横型の個人主義・リベラルな社会では、神の前に平等、自主独立、実名報道、偏見少、強制と補償。感染率は？死亡率は？
- * 階級社会とスラム街の問題
- * 宗教儀礼の特徴 集団礼拝社会と無宗教的社会
- * 発声言語と発音の特徴 摩擦音、破裂音と飛沫感染
- * IT社会と紙・文字(書類)・ハンコ社会 (コンピュータとそろばん)
- * 形式主義 すべてに遅く、小出し・後出しの対策(マスクも現金給付も)。

コロナ時代に学んだこと

コロナ禍を戦時戦災だという人がいるが、しかし感染症による災害は人間同士の争いによるものではなく、本来はむしろ自然災害の一種とみるべきであり、その意味では、自然災害同様、歴史と経験に常に学びつつ、国を越えて、不断の防災措置が必要である。したがって、将来のために、できるかぎり、あらゆる記録を残すべきだし、研究施設や博物館などでも、「コロナ記録・資料」を保存・整理・研究・展観すべきである。

今回の新型コロナウイルス禍は、Eトッドもいうように、新自由主義的政策の失敗もその一因で、効率、競争、利潤第一の政策の中で広く医療体制(初期外来、検査体制など)に大きな油断があった、と見ざるを得ない。

いずれにせよ、コロナ経験を経て、われわれが次に備えて持つべきは、次のような力と思われる。

- ・科学力 マスク、石鹼とアルコール、検査、医療機器、治療薬、治療法、ワクチン
- ・常識力 家庭医(かかりつけ医)と大学病院、電話の利用、医師の判断。
- ・想像力 ウィルスとは？ 毒素(消毒)、細菌(除菌・滅菌)、病原体(微生物) 無生物との中間領域、抗生剤、マスク、手洗い

・臨機応変力 消毒、3密、等々

歴史に学ぶ限り、2波、3波のないパンデミックはなく、しかし克服されない感染症もない。

〈関連文献〉

- 『疾病と世界史』 W.H マクニール 中公文庫
- 『感染症の世界史』 石 弘之 角川ソフィア文庫
- 『世界史を変えたパンデミック』 小長谷正明 幻冬舎新書
- 『感染症対人類の世界史』 池上彰・増田ユリヤ ポプラ新書
- 『人類と感染症の歴史』 加藤 茂孝 丸善出版
- 『感染症と文明』 山本太郎 岩波新書
- 『首都感染』 高嶋哲夫 講談社文庫
- 『ペスト大流行』 村上陽一郎 岩波新書
- 『流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録』 西村秀一ほか 東洋文庫
- 『病の人間史 明治・大正・昭和』 立川昭二 文春文庫